

はやぶさと事業仕分け

戦時中、「加藤隼戦闘隊」という軍歌が流しました。今でも、カラオケバーで、「エンジンの音、轟々と・・・」と、サラリーマンが大声で歌っています。「隼」、「はやぶさ」は、その名の通り、空を飛ぶ速度が速く、時速200km、最高速度300kmという猛スピードで降下、獲物を捕らえるそうです。そこから、戦闘機の愛称とされたのでしょう。

さて、今年6月、その“はやぶさ”が、日本中の感動を集めました。もともと、はやぶさといっても金属製のはやぶさ、小惑星探査機、人工衛星です。今から7年前の2003年5月、小惑星探査機「はやぶさ」は、「イトカワ」という名前の小惑星探査のため、打ち上げられました。小惑星イトカワは、1998年に発見されたばかりの直径330メートル楕円系の小さな惑星。その軌道は、地球や火星と交差しており、地球に近づく可能性がある「地球接近小惑星（NEO）」と呼ばれているそうです。一説によれば、100万年に1回ぐらいの確率で地球に衝突する可能性もあるとか。

はやぶさは、2003年に打ち上げられた後、2005年、イトカワに見事に到達しました。そして、イトカワの地表の砂などのサンプル採集を試みた後、地球への60億キロの帰り道を、制御不能など度々の機体トラブルを乗り越えて、宇宙へと旅立ってから7年目の今年6月13日に奇跡の地球への帰還を果たしたのです。

暗い夜空を流星のように、光の尾を引きながら飛行を続け、やがて、本体は空気との摩擦熱で燃え尽き、大空に消えて行きました。はやぶさが消滅する直前、はやぶさに組み込まれていたカメラが、地球の姿を映し出していました。7年ぶりの故郷を一目見た後、はやぶさは静かに消えていったのです。

しかし、本体から分離したカプセルが、オーストラリアのアボリジニの聖地とされる砂漠に落下、回収されました。もし、砂などのサンプルが採集されていれば、生命の起源の解明など、多くの貴重な成果が得られると期待されているそうです。たとえ採集されていなくても、7年間の宇宙の旅を続けさせ、ついに地球に返すに至った日本の衛星技術は、世界に誇ることのできる偉大な功績です。JAXA（宇宙航空研究開発機構）関係者は、はやぶさ2号の開発を急ぎたいとしているそうです。このはやぶさの劇的な帰還に、管総理はじめ政府高官が絶賛した、ということです。

が、ちょっと待ってください。昨年秋、新政権は、行政の無駄をなくすといって、事業仕分けをマスコミに公開し、華々しくやってみせました。その事業仕分けにおいて、「スパコンで世界一になる必要はない」などと言い切って、科学技術関係の予算に大鉈を入れ、削減しました。実は、麻生内閣時代、10年度予算の概算要求に、はやぶさ2号開発費用約17億円を盛り込まれていたのですが、これも「事業仕分け」によって、で3000万円にまで削られてしまっていました。これでは、はやぶさ2号の開発は不可能です。

私は、昨年秋の事業仕分けの後、私のホームページで、「小資源国日本の生きる道は科学技術振興しかない。安易に事業仕分けと称して科学技術予算を削るべきではない」と訴えました。日本のノーベル賞受賞者の方々からも、激しい批判の声が相次ぎました。しかし、新政権は、科学技術予算の削減を断行しました。そして、はやぶさの奇跡の帰還のあと、事業仕分けをしたR議員（現大臣）らは、手の平を返してはやぶさの偉業をほめたたえ、釈明したというのです。

今回のはやぶさの偉業は、日本人に感動を巻き起こす一方、政策なき、ビジョンなき、国民受けだけをねらうパフォーマンス政治の危うさを実感させる出来事でもありました。